

元気で医い

子どもの不登校

少し離れ考え、現状整理



福井大病院
子どものこころ診療部

西里美葉保臨床心理士

文部科学省の統計によると、二〇一三年度の不登校児童・生徒数の割合は小学校で二百七十六人に一人、中学校で三十七人に一人。小中学校を合わせたおよそ八十六人に一人が不登校であるという計算になります。

不登校とは、病気や経済的な理由を除き何らかの背景により登校しない、あるいはしたくともできない状況が年間三十日以上ある状態を指すそうです。しかし、この定義にあてはまらないにしても「学校へ行くことがつらい」と感じている子どもは少なくないと思われまます。

不登校の原因については、たくさん専門の先生が言われているように、さまざまな要因が絡み合い一つに絞れないことがほとんどです。いじめが原因で学校に行けなくなったり、発達の凸凹から学校環境になじむのがつらかったり、またこれといって大きな理由はないけれど、行こうとすると気分が落ち込んでしまったり、おなかや頭が痛くなったりすることもあります。

不登校になったきっかけと考えられる状況 (文部科学省調査2014年3月公表)

状況	人数	割合
いじめ	2336人	2.10%
いじめを除く友人関係をめぐる問題	16714人	14.80%
教職員との関係をめぐる問題	2038人	1.80%
学業の不振	10295人	9.10%
進路にかかる不安	1498人	1.30%
クラブ活動、部活動等への不適應	2057人	1.80%
学校の決まり等をめぐる問題	2184人	1.90%
入学、転編入学、進級時不適應	3026人	2.70%
家庭の生活環境の急激な変化	6362人	8.60%
親子関係をめぐる問題	12462人	11.10%
家庭内の不和	4482人	4.00%
病気による欠席	8612人	7.60%
あそび・非行	10671人	9.50%
無気力	29196人	25.90%
不安など情緒的混乱	30029人	26.60%
意図的な拒否	5238人	4.60%
上記「病気による欠席」から「意図的な拒否」までのいずれにも該当しない、本人に関わる問題	5900人	5.20%
その他	2722人	2.40%
不明	1888人	1.70%

(注1) 複数回答可とする
(注2) パーセンテージは各区分における不登校児童生徒数に対する割合

大人でも緊張すると胃が痛くなったりするよう、言葉での説明や自分の状況を客観的に捉えることが苦手な子どもの場合、直面するモヤモヤや不安、つらさなどを身体に表す(身体化症状)ことで、ヘルプサインを出しているの

**学校に
関わる
状況**

**家庭に
関わる
状況**

**本人に
関わる
状況**

ではないかと思えます。もちろん、行けない理由が明確である子もいますが、日頃子どものこころ診療部に来られる子どもとお会いすると、その多くは「何だかよくわからないけれど行けない」と話す子がほとんどのように感じます。当初は「これが問題だ」と思っ、ご両親や学校の先生方が環境を整えたり(環境調整)、子どもが欲しい物を与えたりしたにもかかわらず、登校が継続しないということがあります。

学校に行けない状態が続くと、子ども自身、また見守るご家族も次第に焦りや後ろめたさを感じ、自信を失ったり、自分を責めたりすることもあるかもしれません。しかし、「誰かが悪い」ということは決してありません。必要なことは、まず不登校になりそうなサインを見逃さないこと、たとえ不登校になったとしても「誰か(何か)が悪い」と悪者を特定したり、「あれがああいう風に変われば」と原因探しを行うことではなく、子どもが直面する「なんだかわからないモヤモヤ(困難)に共に向き合っていくことではないでしょうか。

ところが、問題や困難があまりに近かったり、子どもやご家族だけで抱えすぎると、愚直さやつらさが増してしまつこともあります。子どものこころ診療部では、子どもやご家族が問題から少し距離をとって考えたり、現状の整理を行ったり、子どもの「なんかよくわからない」について考えたりできる場として、また学校に行けない子どもとそのご家族が取り残されてしまわないように、共に子どもの成長を見守るお手伝いをさせていただきます。

